

山間部社宅街のオーラル・ヒストリー

— 鹿森社宅の生活の記憶 —¹

竹原 信也

An Oral History of a Copper-Mining Town -Life in “Shikamori” Bessi, Niihama, Japan-

TAKEHARA Shinya

Various corporate housing districts were developed in the process of modernization in Meiji era. This article attempts to record the oral history of a worker who lived in Shikamori corporate housing district (1918-1970) near Besshi Copper Mine, Japan. It records, in particular, his experience of organizing and managing the “Shikamori Co-op” as a leader in his community and his duty as a mine inspector.

1 はじめに

1. 1 概要

本稿は山間部社宅街の生活史・労働史研究の一環として、別子銅山（愛媛県新居浜市）の鉱山集落のうち、明治・大正期における「事業の近代化」の過程でつくられた山間の社宅街（鹿森社宅）で長く生活し、また生活協同組合の設立に携わる等、社宅街の運営にも深く携わってきた Y さんのオーラル・ヒストリーを記述するものである。

別子銅山は元禄 4 年(1691)に開坑し、昭和 48 年(1973)に閉山となるまで一貫して住友が経営した銅山である。特に明治以降に事業の近代化、すなわち鉱山鉄道、水力発電所、精錬技術の近代化に取り組み、大きな発展を遂げ、グループ発展の礎ともなった。また、採掘拠点の変遷にともない、山奥から平野部、離島にかけて複数の鉱山町・社宅が建設された²。

鹿森社宅は、大正 5 年 (1916) 頃から建設が始まり 1918 年に完成した標高 250～330 メートルに位置する

労働者用の社宅である。社宅街には浴場・倶楽部・小学校・生協等があり、最盛期には約 300 戸、1300 人が生活した。しかし事業の衰退により昭和 45 年 (1970) に閉鎖・解体された³。現在は、建物の跡が一部残るのみで、植林事業により森林となっている。

筆者は 2010 年から、まちづくり団体や市役所が主催する記憶の継承事業（別子銅山での仕事や生活の記憶を記録し、まちづくりや観光に活かそうとする事業）に関わってきた。その中で、山間部社宅街に関心を抱くようになり、事業の成果と別子銅山の山間部社宅街の生活の記憶を「別子銅山社宅街（鹿森・東平）における昭和の生活史」としてまとめ、山間部社宅街で人々は危険な仕事に従事し、相互扶助の精神のもと、助け合って生活していたこと、しかし必ずしも厳しい毎日だけではなく、人や物の往来があり、日用品に不自由はなかったこと、現実を受容し、娯楽や運動を通じて生活を楽しんでいたこと、危険な仕事に従事し厳しい生活をしていたが故の“だらかさ”や“寛容の精神”が存在していたことを論

じた⁴。しかし、この報告は、東平地域と鹿森社宅を区別せずに山間部社宅街として論じたため、それぞれの社宅街の差異について検討するには至らなかった。

そこで、本稿では別子銅山の山間部社宅街のうち、鹿森社宅を対象を絞って、この社宅で長く生活した Y さんのオーラル・ヒストリーを記述する。Y さんは 1921 年（大正 10 年）に鹿森社宅で生まれた。幼少期に鹿森社宅を離れたが、終戦後に鹿森社宅に再び住むことになり、そこで復興会（自治会）の会長をつとめた。また鹿森生協を立ち上げ、理事長として運営に携わった。また、平素は警備係として社宅街を巡回することもあり、鹿森社宅を見つめ続けた。この点、Y さんの歴史と鹿森社宅の歴史は大きく重なり合っている。



図 1. 鹿森社宅の様子（提供：河野義隆氏）



図 2. 現在の鹿森社宅跡（2010 年筆者撮影）

1. 2 山間部社宅街をめぐる視角

社宅街とりわけ明治の近代化の過程でつくられた山間部社宅街は、現代日本の地域社会と自治のありようを考える上で示唆に富む空間である。

鉱山や鉱山集落については、歴史学や鉱業地理学の分

野で、歴史研究や実地調査が行われてきた⁵。

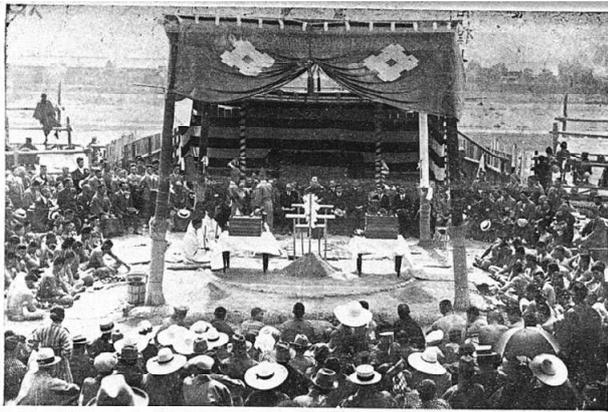
そもそも国内外を問わず鉱山集落は地下資源という人間の欲望にもとづいて機能的に形成される集落であり、鉱山事業の発展とともに人口は増加する。そして事業の展開により坑口・設備・生活空間も連続的に推移し、事業の終焉とともに生活空間も衰微して行く。また多くの鉱山集落は、山間僻地に存在し、空間的孤立性を有し自己完結的な空間である。しかも、このような鉱山集落の多くは単一の企業が占有している（company-owned town、single-enterprise community）⁶。

日本には古くから多くの鉱山が存在し、金・銀・銅等の鉱石が重要な輸出品目であった。それゆえ日本の鉱山にはその歴史があり、特有の鉱山社会・文化を形成してきた。坑内労働は危険が高く、また熟練の技術を必要としたことから独特の職業観が形成された。例えば、近世の鉱夫には不妻帯の掟があり、「鎚親」制とも言える擬制的親子関係が取り結ばれていたこともあるという。組織立たずに身に付けた技能をもとに鉱山を遍歴する渡りの金堀も存在していたようである⁷。明治期以降は、主として熟練の鉱山労働者のための自助的救済機関・友子制度も広く存在した⁸。

さらに近年、建築史的アプローチからの研究が積極的に進められ、その先進性が再評価されるに至っている。それによると、わが国の近代的な社宅街は、日本の事業家・資本家が、博愛精神や合理性の精神、労務管理や福利厚生などの近代西洋思想に触れ・吸収する過程で、試行錯誤しながらつくられた。それゆえ社宅街は計画的に整備され、病院や学校、娯楽場等多くの福利厚生施設が建設された。従来の研究は、社宅街を劣悪な住環境として捉えがちであったが、むしろ、住環境の改善に先進的に取り組むケースが多かったというのである⁹。

ただ、近代化といっても単なる西欧先進技術の導入ではなく、日本の土着性や固有のアイデンティティも重視された。例えば、別子銅山の経営者は政府要人や思想家らと禅寺を通じて広いネットワークをつくっていた。また別子銅山の経営者は、その経営理念として西洋技術を導入しつつもその目的を国家の発展に寄与するという「国益志向性」を見出し、さらにはその「国益指向性」を労働者にも「善導」によって導こうとした。そのため、禅僧を招いたり、自彊社という私塾をつくったり、労働組合抑止のための改善会や親友会といった団体をつくっている。住友は「禅」や「国家」を主軸にした労働者教化を行っていたのである。かくして住友の労務管理は国家の発展に寄与する善良なる労働者の育成という方向性を持ち、その中で労働組合は抑制された。かわりに住友の「温情主義」的な労使関係の成立や労働環境の改善も

行われたのである¹⁰。



(原原野) 式親後土會大親相納奉典祭神山

図3. 住友の労働者団体、住友予州親友会による山神祭典奉納相撲大会の様子。アマチュア相撲としては日本でも屈指の規模を誇った。大正末期から昭和の初期において、別子銅山の常務取締役をつとめた鷺尾勘解治は国民の修養・国民精神の体現として労働者の相撲を奨励した。(改善会「改善」第二卷第六号八月号、1927)

1. 3 オーラル・ヒストリーによる接近

以上のように、山間部社宅街は、山間の僻地に計画的に建設され、多くの福利厚生施設がつけられた。その背景には、博愛精神や労務管理といった近代西洋思想の導入が存在した。ただ、日本の鉱山は、古くから存在し、独特の歴史文化が形成されてきた。また近代化とは単なる西洋思想の導入ではなく、土着性も重視した。してみると山間部社宅街の空間には、鉱山独特の歴史・文化、広い意味での日本の土着性、近代西洋思想、それらと葛藤しながら独自の路線を模索しようとした国民・国家概念が反映されている。そうした意味で、山間部社宅街は特殊な空間であり、だからこそ現代日本の地域社会や自治のありようを考えて行く上で示唆に富む空間であるのである。

しかしながら、現在多くの鉱山・炭鉱は閉山し、併せて社宅街も多くが消滅している。そこで、本研究では、生活者のインタビュー、すなわちオーラル・ヒストリーによる接近を試みる。

ポルトンプソンは、オーラル・ヒストリーが生み出した成果として労働史をとりあげ、その一つの形式として、「一つの産業に大きく依存している町に焦点をあてたコミュニティの歴史」をとりあげる¹¹。

コミュニティ研究は、特定の地域における特定の集団についてそのあるがままの姿に着目する。この点、オーラル・ヒストリーはそのコミュニティについてのより豊

かな記述を可能にする。すなわち、マイノリティの歴史、公の記録に残らないこと、日常生活等を明らかにすることが出来る。このようにオーラル・ヒストリーは、コミュニティ内の様々な側面に光が当てることができるという特徴を有する¹²。

博愛精神や労務管理といった近代西洋思想や、国益指向性や禅がまちづくりに反映された帰結として人々は一体どのような関係性をもつにいたったのか、オーラル・ヒストリーは、そうしたコミュニティ内の直接目には見えない関係性にも光を当てることができる。また社宅街で生活していたのは、坑内で厳しい労働に従事してきた男性だけではない。子供や女性、往来者、行商がいて、それゆえ、街は重層的な記憶を抱えている。そうであれば、オーラル・ヒストリーもまた「社宅街の豊かな街の表情を生き生きと映し出すこと」¹³を可能にするかもしれない。本稿の調査対象のように、現存しないコミュニティの歴史、その中でも公的文書に残りにくい労働者階級の人々、庶民の生活の歴史をとりあげようとするとき、オーラル・ヒストリーの手法は有効であると考えられる。

2 Yさんのオーラル・ヒストリーと鹿森社宅の記憶

2. 1 調査の概要

本章では、Yさんのオーラル・ヒストリーと鹿森社宅での生活の記憶を紹介していく。筆者は、記憶の継承事業でゲストスピーカーであったYさんに対し、個別に3回のインタビューを実施した。各回の日時については、1回目：2011年11月22日13:30-15:30、2回目：2012年1月30日13:30-16:00、3回目：2012年2月13日12:00-15:30であった。聞き手は、筆者とYさんの親戚であり、郷土教育にも携わっているGさんの2名である。場所は、Gさん宅であった。筆者は録画・録音し、トランスクリプションを作成した。トランスクリプションをストーリーごとに小分けして、ナンバーと見出し・キーワードを付した。

2. 2 Yさんの略歴

Yさんは1921年(大正10年)に鹿森社宅で生まれたが、家庭の事情から鹿森社宅を離れ親戚の家を転々とした。その間、尋常高等小学校を卒業し、1年を経て住友機械製作(株)に就職、第二鑄造という部署で、インゴッドケースの製作等に従事した¹⁴。仕事の時間は月曜日から土曜日の朝7時から午後の4時までであり、休みは週一回であった。鑄造に従事するのは午前中だけで午後からは、座学の勉強をした(鑄物場から唯一人、社内の養成校に選抜された)。仕事後は青年学校に行き、銃剣術など

を習った。なお、この時 Y さんは鹿森社宅ではなく、親戚の住む打除社宅に住んでおり、そこから車で仕事場に通ったという。

昭和 17 年（1942 年）、Y さんは徴兵検査を受け、海軍に入隊した。その後、訓練を受け佐世保の航空隊に配属された。そして海南島で主として事務関係の仕事に携わった。次に、普通科練習生として日本に戻り、飛行機の機体、エンジン等について学んだ¹⁵。練習生を終えると教官の助手になり練習生の訓練などに従事した。その後は高等科練習生となり、飛行機の整備などを学んだ¹⁶。その時の科目は紫電改であった。その後、首都防衛のために、関東に赴き、終戦を迎えた。

終戦後、鹿森社宅に戻ると同時に、住友別子鉱業所に入社し、坑内労働に一年間従事した。同時に、労働組合の活動に積極的に参加するようになり、青年部長もつとめた。その頃、昭和 22 年（1947）に約一カ月のストライキを含む大争議も経験している¹⁷。また組合専従の時期もあった。専従職員の次は、警備係として定年（55 歳）まで勤めた。その間、住鉱連¹⁸の書記長に推挙され、東京で本社と、労使交渉も行っている¹⁹。Y さんが書記長を務めた昭和 28 年（1953）の賃金闘争は全鉱連による統一闘争であったが、一部の組合が脱落して、妥結すると、住鉱連も統一闘争から脱落し、単独妥結した。この事が、直後の総会で批判され、別子労働組合、住鉱連の執行部は全員辞職した。8 月 17 日の全鉱連の第 20 回大会では、住鉱連は統制処分を受けている²⁰。Y さんは、辞職を機に、組合活動とは距離を置くようになった。かわりに、鹿森社宅の教育復興会（現在でいう自治会）の会長になり、生活協同組合を立上げ、理事長として運営に携わった。定年退職後は、自宅を購入し、静かな余生を送っている。

2. 3 生活の記憶、街の記憶

2. 3. 1 個人商店の記憶、散髪屋

鹿森社宅には生協がつくられる以前から個人商店があり、会社の許可を得て営業をしていたことがわかっている。食品店が 2 軒、その他に豆腐屋、散髪屋もあった。食品店では、専売品の塩、たばこの他、酒や日用雑貨も売っていた。肉屋もあったが、生協の設立から数年後に閉店した。魚屋はなく、市内から行商が来ていた²¹。この個人商店についての Y さんの語りを紹介していく。

Y さんの記憶では、食品店は、大砂商店と岡商店であり、肉屋は清水という名前であった。大砂商店は、酒とその他日用品を販売していた。岡商店は、豆腐、タバコ、それから学校の横にあったので子供用の文具も売っていた。その他にも、個人販売する家があったようだ。例え

ば、Y さんとの語りに誘発された G さんの幼少の記憶では、夏に心太（ところてん）を売る家があったという。

興味深いのは Y さんの散髪屋に関する語りである。散髪屋には男が集まって囲碁や将棋をする集会所・サロンのような機能も果たしていたようである。Y さんは、将棋に熱中して、順番を飛ばしてもらったという話を嬉しそうに語る。

Y: 「あそこ行ったら誰かおるきん行ってみよ」いうて、ほんで散髪みとつてもね、将棋の相手がおったらやりよるでしょ。「Y さん、順番来たよ」いうたら、「ああ、誰か次の人やったって」(笑)いうて、やって(笑)。でその日（散髪を）やらずに帰ったりするきん(笑)。

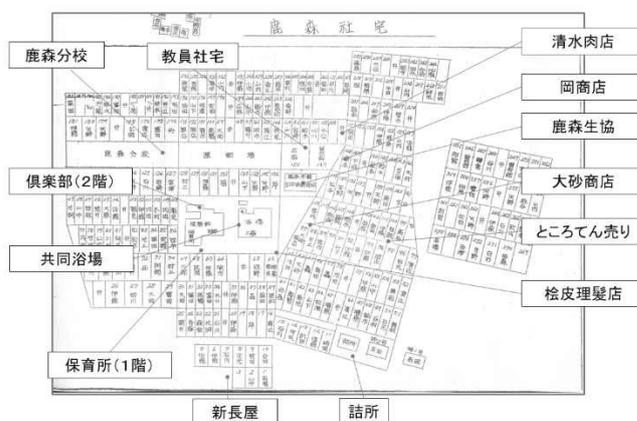


図 3. 鹿森社宅における施設・商店（昭和 30 年代の住宅地図を元に筆者作成）

2. 3. 2 相互扶助の精神と平和な生活

山間部社宅街の特徴の一つとして不和を好まず、強い連帯と相互扶助の精神を持って生活していたことが挙げられる。様々な事情で各地から銅山で働くために集まり、不便で他と隔離された集落で生活する人々は自然と助け合いの生活へと向かう。それゆえ、社宅での生活は「仲が良かった」ことや「団結していた」というエピソードが繰り返し語られる。象徴的な話が、赤の他人でも、兄さん、姉さんと呼び合ったと言う鹿森社宅独特の習慣である。

Y: 自然に結局、あの一昔からね、(注: 鹿森社宅の人は) 何か一家の者という、お互いが兄弟じゃー。だから、よく、〇〇兄、〇〇姉とかいう風に。兄貴じゃお姉さんじゃいうて呼ぶように。全然赤の他人でも、呼ぶように。結局そういう風な雰囲気になつとるし、それから、僕はよく話すんじゃけど、スイカなんか水場が一つやから、置いといたら、それを「あ、今日は

どこそこか、どっか知らんけど、スイカ買うとるきん、分けてくれるよー、ちょっと待ちよったら」じゃの言うたら、案の定、どこからか持ってきてくれるんよね(笑)。ほんで自分方に買った時分は、やっぱし持って行ってあげるけど。そういうことで結局お互いが。それとまあさつきも話しよったように、味噌醤油の貸し借り。こういうことでおっもう気持ちがお互いにもう家族みたいな気持ちになっとなですわね。

2. 4 警備係の仕事内容とそこから見る社宅街

Yさんは、組合専従を辞め、職場に戻ることになった。その際、会社と交渉し、もといいた坑内夫ではなく、警備係として勤めることになった(もともと危険な坑内ではなく、坑外で勤務するという約束で入社していたという経緯があった)。

警備係は端出場事業所に20名程度いた。勤務場所は、端出場事業所と新田社宅、鹿森社宅、山根社宅の詰所であった。端出場事業所での仕事は、正門、坑口(第四通道)の出入り口、火薬庫といった重要箇所での警備である。約2時間を目安に、ローテーションで各箇所を回っていく。夜間は二組に分かれ、8時半から9時～夜の1時までと夜の1時から5時くらいまでそれぞれ夜勤を行った。

鹿森社宅の詰所での勤務の場合、仕事は一人で行い、詰所に勤務しつつ、定期的に巡回・点検した。まず朝7時に、仕事を引き継いで、最初の仕事は水源地の状況を確認することであった。水源地に落ち葉などの溜まり物があればそれを除去した。それから水源地から引かれた水を塩素滅菌するタンクがあり、そのタンクを巡回し、塩素滅菌の状況を確認した。その帰りに、鹿森社宅の一部を任意に選んで巡回した。この時間帯には、子供は学校に行っており、夜勤の人や女の人がいる程度で閑散としていたという。また、特に大きな出来事もなかったようで、共同の炊事場での水が出っ放しになっているのを止めるなど穏やかな日常であったようである。巡回して、詰所に帰ってくるのは朝の10時ころであった。午後は、集落と事業所との間の道なりにある工場の防火用タンクの点検、社宅の一部を巡回した。定期的な連絡義務はなく、基本的に言葉で引き継ぐだけであったという。保安本部には日誌があり、「何時何分、鹿森異常なし」と書くようになっていた。

詰所には警備とは別に事務の人がいた。詰所の奥には土間廊下がある。通路の右手には畳3畳くらいの宿直室と便所、左手には板間の事務室があり、日中は事務員が仕事をしていた。また事務課の中には、放送用マイクの

スイッチがあった。スピーカーは詰所の前にあり、必要に応じて連絡・放送した。事務員は、鹿森社宅全体の総務、事務的なことをしていた。詰所の隣にその事務員の家があった。

鹿森の詰所での勤務は一人であった。夜は宿直室で1時から朝の5時くらいまで仮眠をとった。二勤の人が12時まで仕事をしておりその人たちが社宅に帰ってくるのを見届けてから仮眠をとった。道には電燈が設置されており、道は明るかったという。

警備係の勤務形態は、朝の7時から翌朝7時まで24時間勤務であった。朝7時に仕事を終えると、その日は非番であった。この1日勤務1日非番(Yさんはこのことを「日してがい」という)を土日関係なく、繰り返した。そして月に4日間程、非番とは別に休暇があった。この24時間勤務で二日分の仕事をしたことになる。さらに特別勤務手当というのが出た。すなわち、8時間×2日の仕事とは別に、さらに4時間分の時間外手当がついたという。これは残業手当が出ない代わりにの措置であったようだ。

この1日勤務1日非番の勤務形態は、Yさんが生協の活動をするには都合がよかった。非番の日に生協での仕事をする事ができた。警備係であったからこそ、生協と仕事との両立ができたのである。

鹿森社宅には戦前には駐在所があったが、戦後はなく、警察が存在しない状態であった。その意味で、警備の仕事には、社宅街の警察的な意味合いの仕事ももつのではないかと推測されるが、Yさんの話では、窃盗や暴力、火事といった大きなトラブルや事故はなかったという。

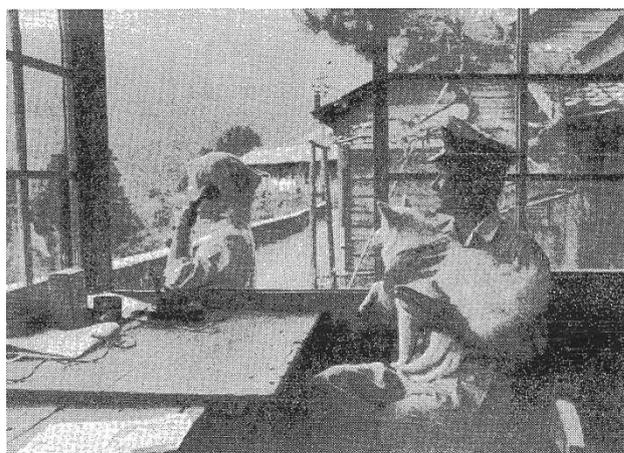


図4. 鹿森社宅の詰所での警備の勤務の写真記事。記事の見出しには、「詰所の風景 頼もしいヤマの交番」とある。(特集『閉山10年別子あのころ』20回目記事より：愛媛新聞 昭和58年4月8日)

2. 5 鹿森生活協同組合の設立と運営

2. 5. 1 設立までの道程

Yさんは、鹿森社宅の教育復興会（自治会の前身）の会長として、Yさんは生協の設立と冠婚葬祭の簡略化を目標に据えた。そこでYさんは、鹿森生協の設立に奔走した。生協の設立と運営において中心的な役割を果たしている。

Yさんが生協を見聞きしたのは、上述の、組合活動で東京に行っていた時である²²。Yさんは、争議や労使交渉による賃金の上乗せを勝ち取っても、それよりも早いペースで物価が上昇していたため、実質的な生活の向上には繋がらないというジレンマを感じていた。「こっちは給料上がったと思ったら、物価の方も先へもうあがってるわけ」「だから生活そのものはあんまり楽にならんわけよ」。しかし、「これはちょっとななんとかならんかなあ思うた時に」、東京で賀川豊彦と生協の事を知る。もともと、鹿森社宅には最寄りの配給所（端出場事業所）まで山道を上り下りしなければならぬという運搬の問題が存在した。この問題は、Yさんが生協をつくる大きな理由となった。

Y：結局、私たちが鹿森に生協を呼ぼうという理由は、まあ一番大きな理由は、結局ご婦人の人がね（中略）、その当時はあんまり働きにいかなかったでしょ？そうすると家に一日おって、ほんでまあ配給所、端出場まで降りて、（そ）して上がってきよったら結局まあおそらく1時間半から2時間は時間かかる。そうすると小さい子供なんかおいとったら心配（中略）ですからね。心配だろうし。だからそれをなんとか解消せんかということの最初が、結局幼稚園、あの保育園の件で、まあ次、私が言いたした生協を作ったらいいじゃないか。上においてあの買い物できるじゃないかと、ほんなら時間にしても空けても、（中略）済むからいうことで・・・

この問題に対してYさんらは、配給所を端出場から鹿森に移すよう会社と何度も交渉したが、上手くいかなかった。そこで、自分たちで生協をつくることにした。といっても始めるには元手が必要になる。そこでYさんは、住民を説得して回る。中には「うまいくのか」と不安の声もあったが、「配給所で買うより、一割は確実に安いこと」と説得材料にしたという。既存の個人商店にも、一軒一軒回って了解を得た。こうして、納得してくれた住民から千円ずつ約20万を集めたが、それでも資金は不足していた。そこで、資金に余裕のある住民に保証人になってもらった。並行して、設立委員会を自治会でつ

くり、定款を作成、会員から役員を決めた。こうして昭和30年（1955）の3月17日に鹿森生協は発足した。別子労働組合『「50年の回帰」別子労働運動史』1961、p252では、「実質的な賃金向上のため、部落組合員が資金をだしあい、Y氏を初代理事長として生活協同組合を設立。売上も順調で今後の成長が期待されている。」との記事が見られる。

会社としても既に、配給所は利益を出していない部署であり、配給所を鹿森に移転するより、住民らに生協を運営させる方が経費節減という意味からも都合がよく、会社側は生協づくりには協力的であり、生協の店舗の内装や増築は会社が費用を負担してくれたという。

場所は戦前の駐在所があったところにつくった。内装は会社に頼み、増築や別に米倉庫も造った。材料は、住友林業から提供してもらっている。また、生協の理事の中には大工がおり、その大工が主になって建築してくれた。生協の設立には、こうした会社の協力や協力者の存在があったのである。

2. 5. 2 試行錯誤の連続

こうしてつくられた鹿森生協であるが、運営は試行錯誤、苦難が続いた。例えば、最初は、新居浜の市場が野菜を売ってくれなかった。野菜のない生協もどうかと思い、隣の行政区域である西条市の市場に相談に行ったところ、たまたま、海軍時代の同期がいた。その人が取り持ってくれて、西条の市場から野菜を仕入れることができるようになった。Yさんの記憶では、一番最初に仕入れたのは、夏柑であったという。こうした偶然の再会によって西条の市場から、約二カ月、商品を仕入れたが、今度は新居浜の市場も組合時代の知り合い（＝組合専従時代に書記に雇った女性）の親が、新居浜の市場で野菜を扱っていた（せりをしていた）関係で、その知り合いの親から野菜市場の株を売ってもらう形で市場の株主になり、野菜を購入できるようになった。

仕入れについては例えば、最初の頃は魚を仕入れるといったら、いわしならいわし、さばならさばというように1種類をまとめて購入することが多かった（そのため、家の食事は大体どこも、同じ魚を食べることになる）。後に魚屋さんが入ってからは、色々な魚を仕入れるようになった。

どの商品をどれだけ仕入れるかといった経営判断は、素人では難しい。そこで最初は行商人に仕入れ量の目安や流行りのものなどについて相談していた。商品の仕入れは買い掛けであった。後に、商売経験者を主任として1名雇い商品の選択や注文を任せるようになった。

人事の面でも、試行錯誤が続いた。当初は、社宅に住

む女性を雇ってレジ等をさせていた。ただ、鹿森社宅はお互いがお互いのことをよく知っているため、誰が何を買っているのかもすべてわかってしまう。言葉づかいも「ねえーねえー」というように友人関係のようにならざるを得ない。それが「商売らしくない」と客から文句も出るようになったので、全員辞めてもらい、次からは、鹿森社宅以外の人を雇うようにしたという。辞めてもらう際に Y さんが話を聞いたところ、近所の人だとどうしても「ありがとうございます」とは言いづらかったのだそうだ。

さらに、生協を設立しても山間にある社宅までの運搬問題は完全には解消されなかった。今度は商品を誰かが上げないといけなくなったのである。運搬のために女性 5~6 人を雇って商品を社宅まで上げていたが、人件費が問題となった。そこで、Y さんは、会社に要求して巻揚げ式の索道（ケーブル）をつくってもらおうと交渉した（鹿森社宅の末期に、生協と同じ高さのレベルまでケーブルが設置された）。電気は会社から貰っていたが、供給される電力量にはどうしても限界があった。そこで電力に関しては会社からではなく独立して、電力量を上げるという意見もあった。

2. 5. 3 軌道に乗ってからの運営

試行錯誤を続けながらも 1 年後には、出資金を一人一人に割戻すことが出来た。同時に、もう一口いれてもらう形にして、出資金を増やした。住民らは「生協だったら損しない(笑)」と考えるようになりさらに出資してくれる人もいたという。

鹿森社宅の生協はいわば手作りの組織であった。設立目的も、物価高と社宅の運搬問題が主な理由であり、営利目的ではない。Y さんは、鹿森生協の売値は全て仕入れ値の一割増しにした。Y さん曰く、普通は商品によって差があり、例えば、衣料品は高く、食糧は安いものである。しかし、鹿森社宅では、そうした常識を度外視し、全ての商品を一割増しで売ったのである。すると面白いことに、その評判は他所の社宅に広まっていった。別の社宅の人から頼まれて鹿森生協で購入する住民もでてきた。鹿森生協の評判は他の社宅にも伝わり、後に新田社宅や東平地域でも生協が作られた。鹿森生協は別子銅山社宅街の生協の先駆けとなった。

こうして鹿森生協の運営は軌道に乗るようになった。生協には酒類などを除いて、大抵のものは揃えた。米も、設立から 2 年を過ぎたあたりから、権利を買って扱えるようになった。子供の遊具も生協で扱っており、例えばフラフープやだっこちゃんなど当時、流行していた物は揃えた。（ただし、コマやラムネの玉、メンコは岡商店が

取扱った。）

反物など高価なものは行商に売りに来てもらっていた。その時は、生協の事務所の一部屋を使って展示即売を実施した。

野菜や果物は現在のように種類が豊富なわけではなく野菜は、大根、白菜、ほうれん草、にんじん等が主であった。果物類もバナナ、りんご、みかんなど扱う種類は限られていた。

Y さんは、警備係であり、1 日勤務 1 日非番の勤務形態であったが、生協の活動をするには都合がよかった。非番の日に生協を見に行くことができたからである。Y さんは、非番の日は生協に行って主任と打合せをしたり、帳面や品ぞろえを確認したりした。また、客（おもに女性）から、色々相談を受けることもあった。Y さんはこうして非番の日には店に顔を出し、場合によっては一日、半日いることもあった。

鹿森生協の夏の目玉がかき氷であった。子供たちは風呂や山道を登ってきた帰りに、かき氷を食べることを非常に楽しみにしていたという。Y さんは、

Y: ほんであれば、もう砂糖は、もう丸々普通の砂糖使
って、(合成) 甘味料やかいうの (使わないで) ・ ・

G: ほやきん、もうごまかしせんと。美味しいようにし
とるきん。

** : ああー

Y: もうけやかどうでもいいんじゃきんいうことで。一
つのあれに、生協に来る楽しみにして

G: あれ人気あったね

Y: あった。あれは人気あった。

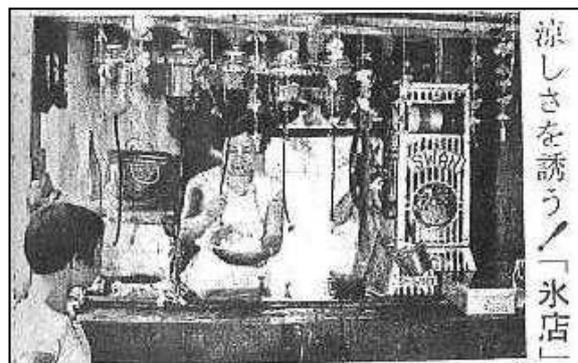


図 5. 鹿森生協の氷店の様子（鹿森会『鹿森』第 2 号、2001、p7、ヒシヤ印刷）

生協を設立してから 8 年後の昭和 38 年に発行された鹿森生協ニュースに、理事長であった Y さんは、以下のような文章を寄せている。

「過ぎ去った八年と謂うものはつい此の間の様な気がする。開店当時はわずかに十二・三坪の売場で一ヶ月九十万円の売上げをとさまやかな計画のもとに始めたが、今日では売場面積四十二・三坪、月売上二百四十五・五十万円オーバーとしていて。組合員二百四十名、年間売上二千八・九百万円と謂えば生協では弱小組合であるが、組合員一人当売上及内部経営の堅実さ等は他の生協と比較しても決して引けをとらないものがある。これは組合員一同の理解と協力によるものである。」鹿森生協ニュース昭和38年7月30日記事(鹿森会『鹿森』第2号、2001、p6、ヒシヤ印刷)

以上、鹿森社宅の設立およびその運営についてYさんの記憶、オーラル・ヒストリーを記述してきた。鹿森生協設立により、人々の暮らしはより充実したものになっていた。それゆえ、運営当時から、「ありがとうございます。お陰で助かる」ということをよく聞いた。そんなときは、安心して、「つくってよかったなあ」と思ったそうである。

なお、その後、鹿森生協は、別子銅山の別子新田社宅や東平地域の生協と合併し、別子生協となり、Yさんはそこでも理事長を務めた。平成2年(1990年)には、住友化学の生協と合併し、生活協同組合アイコープとなった。平成16年(2004)には生活協同組合コープえひめとして現在も運営が続いている²³。

3. おわりに

本稿では、山間部社宅街をめぐる様々な視座やオーラル・ヒストリーの手法の有用性について論じた後に、鹿森社宅に長く生活し、生協の設立と運営に携わり、同時に警備係として鹿森社宅を見つめ続けたYさんのライフ・ヒストリーを記述してきた。以下、本稿の成果と課題を述べる。

まず、鹿森社宅の個人商店について、とりわけ散髪店が男性労働者の憩いの場としても機能していたことを明らかにすることが出来た。

続いて、鹿森生協の設立と運営の実態を明らかにすることが出来た。これまで、別子銅山の社宅には生協が存在し、人々の生活の助けになっていたことや、そこで買い物をしたという思い出は繰り返し語られてきたが、実際に設立し、運営した内部者の視点から語られることはなかった。

Yさんは、組合活動や自治会の活動、あるいは生協づくりに関して指導的な立場となって会社と粘り強く交渉

を続けたことがわかる。組合の役員を辞職したり、住民から生協について意見されたりすることもあったが、Yさんは常に住民の生活の改善のために奮闘してきた。氷店の語り「もうけやかどうでもいい」や仕入れ値の割増しで商品を売ろうとしていたというエピソードはその証拠であろう。

言い換えれば、Yさんは地域の公共的な課題に取り組んだといえる。空間的に孤立している山間の社宅街で企業と粘り強く交渉を重ねながら、まちづくりに奮闘する姿勢から現在の地域社会、自治のあり方を考える上で私たちが学ぶものは多いはずである。

最後に、別子銅山端出場事業所の、警備係の仕事の内容を明らかにすることが出来た。これまで、坑内における労働の実態については、人々の注意を引き、また語られてきたが、周縁的な仕事である警備担当の仕事の実態については、明らかにされてこなかった。

驚くことに、鹿森社宅には戦前は駐在所があったが、戦後は、警察署はなく、裁判所もなかった。警備係として鹿森社宅を見つめ続けたYさんは窃盗、火事その他暴力事件を聞いたことがないという(唯一Yさんが知っている事件は、幼少期に聞いた85~6年程前に男女の関係のもつれからおきた殺人事件のみである)。そもそも、鹿森社宅には、鍵をかける習慣がなく、引き戸に鍵もなかった。外出するときもそのままにしていたという。様々な事情で各地から銅山で働くために集まってきているのに、なぜだろうか。どこかに抑制のメカニズムが働いていたと考えることはできないだろうか。本稿では明らかにすることができなかったが、今後は、それらを生み出す人々の心理や関係性を読み解いていくことが必要になる。

以上

謝辞

まずインタビューに快く応じてくださり、また貴重なお話をいただいたYさんに感謝申し上げたい。また本研究は、別子銅山・記憶の継承事業に参加したことから始まっている。この点、事業の企画・実施者である株式会社リージョナルデザインの安孫子尚正氏やえんとつ山倶楽部の関係者の皆さま、新居浜市別子銅山文化遺産課の皆様、貴重なお話しを頂いたゲストスピーカーの皆様と参加者の方に感謝申し上げます。そして河野義隆先生には新居浜や別子銅山の歴史等について丁寧に教えていただいた。松山大学の山田富秋教授にはライフストーリーの方法論について教授頂き、調査においても有益なご助言を頂いた。また鹿森会の皆様とりわけ山川静雄氏には、会の行事に参加させていただき、また多くの

お話を聞かせていただいた。重ねて感謝申し上げたい。ありがとうございました。

なお、本研究は科学研究費助成事業（若手研究 B）25871045 による成果の一部である。

脚注

- 1.本稿は、法社会学会 2012 年度学術大会、オーラル・ヒストリー学会 2012 年度大会自由報告において発表したものをさらに整理・考察したものである。
- 2.新居浜市企画部別子銅山文化遺産課『別子銅山が育んだ山田社宅現況調査報告書』、2010
- 3.山村研究会「端出場」及び鉱山集落「鹿森」での生活『山村文化』16号、1999、pp.25-47
- 4.竹原信也「別子銅山社宅街（鹿森・東平）における昭和の生活史」『新居浜工業高等専門学校紀要』48巻、2012、pp.43-50
- 5.代表的なものとして、川崎茂『日本の鉱山集落』1973、大明堂や小葉田淳『日本鉱山史の研究』1968、岩波書店がある。
- 6.川崎茂『日本の鉱山集落』1973、pp.3-23、388-395、大明堂
- 7.萩慎一郎「補論三『鉱夫雑談』における「ヨキカネホリ」像と幕末院内銀山の金堀り一揆」『近世鉱山社会史の研究』1996、pp.448-474、思文閣
- 8.例えば松島静雄『友子の社会学的考察』1978、御茶の水書房、別子銅山については村串仁三郎「大正昭和期における別子銅山の友子制度」『大正昭和期の鉱夫同職組合「友子」制度一統・日本の伝統的労資関係』2006、pp.117-154、時潮社
- 9.社宅研究会編著『社宅街 企業が育んだ住宅地』2009、学芸出版社
- 10.瀬岡誠「近代住友の経営理念」宮本又次・作道洋太郎編著『住友の経営史的研究』1979、pp. 374-450、実教出版
- 11.ポルトン・ソン著、酒井順子翻訳『記憶から歴史へ』2002、p157、青木書店（Thompson, Paul, 2000, *The Voice of the Past: Oral History*, 3rd Edition, Oxford University Press）
- 12.吉田かよ子監訳・訳 平田光司・安部尚紀・加藤直子訳『オーラルヒストリーの理論と実践—人文・社会科学を学ぶすべての人のために』2011、pp.31-38、インターブックス（Yow, Valerie Raleigh, 2005, *Recording Oral History: A Guide For The Humanities And Social Sciences*, 2nd Edition, AlataMira Press）
- 13 社宅研究会編著『社宅街 企業が育んだ住宅地』2009、学芸出版社、p232
- 14.現在の住友重機械工業のこと。もともとは、住友別子鉱業所の機械課であり、住友事業の拡大に伴い、昭和9年に住友別子鉱山より分離独立して設立された。戦時中は軍需品として陸海軍に铸造品を卸していた。（麻島昭一『戦間期住友財閥経営史』1983、pp.228-233 東大出版会）
- 15.Yさんの記憶では知多半島に行ったという。知多半島の河和（こうわ）海軍航空隊と推察される。
- 16.Yさんの記憶では、厚木（神奈川）の相模航空隊、兵庫の川西航空隊に行ったとのことである。
- 17.昭和22年（1947）におきた別子大争議のこと。6月16日より33日間にわたるストライキに突入した。後に中央労働委員会の調停により9月17日に解決した。（住友金属鉱山労働組合総連合会『住鉱連50年史』1996、p200）
- 18.住友金属鉱山労働組合総連合会の略。財閥解体期の昭和23年（1948）に井華（せいか）金属鉱業労働組合全国協議会として発足。その後、住友の称号復活を機に、住鉱連となった。傘下組織は、別子、鴻之舞、国富、佐々連等計11団体であった。（住友金属鉱山労働組合総連合会『住鉱連50年史』1996、p2）
- 19.全国各地の鉱山の労働組合が東京に集まり労使交渉を行っていた。Yさんは昭和28年3月16日～8月24日までの期間、住鉱連の書記長を務めている。（住友金属鉱山労働組合総連合会『住鉱連50年史』1996、p421）（別子労働組合『「50年の回帰」別子労働運動史』1961、p191）
- 20.昭和28年の住鉱連の単独妥結と統制処分については、別子労働組合『「50年の回帰」別子労働運動史』1961、pp.197-200が詳しい。
- 21.山村研究会「端出場」及び鉱山集落「鹿森」での生活『山村文化』16号、1999、pp.45-47、
- 22.戦後生協運動には3つの高揚期があった。最初の高揚期においては日本協同組合同盟が結成され賀川豊彦が会長となった。第二の高揚期は1953～58年であり、労働者福祉運動の発展によって形成された。この時期、労働組合を推進母体とする職域生協として炭鉱生協が多く設立された。（相馬健次、戦後日本生活協同組合論史 主要書籍を読み解く、2002、pp1-4、日本経済評論社）
- 23.日生協創立50周年記念歴史編纂委員会、現代日本生活協運動史・資料集第三巻資料・データ編、2001、p235、日本生活協同組合連合会